

# 4

## 筑波大学から羽ばたいて

筑波大学の教育の特色はどういうものなのか。また、その成果はどうなのか。本学の教育は、今後どうあるべきなのか。

これについては、じかに卒業生の声を聞くのが早道だろう。思い出や注文、回顧談、印象に残る授業など、筑波大学の教育にまつわる意見や提案をうかがった。

筑波大学開学  
30周年記念

いしづえ  
新世紀への礎

## 想像力を磨くために

朝倉博樹

日建設計・名古屋オフィス 企画開発室長

1985年 筑波大学大学院修士課程環境科学研究科修了

### 筑波大学の先生方との出会い

私は、1979年に社会工学類に入学し、都市計画専攻を卒業後、大学院環境科学研究科に進学、1985年に修了するまで計6年間を筑波大学で過ごしました。

大学院修了後は、現在の勤務先である建築設計事務所に入社し、都市計画・開発プロジェクトのコンサルタントとして東京で17年間勤務し、昨年から名古屋に異動となり、現在に至っています。

学生時代の思い出には様々な思い出がありますが、大学で学んだことを思い出すと、まず、大学や研究所等で研究活動に従事されてきた先生方や、官公庁や民間企業等で実務に携わってこられた先生方など様々な経歴、実績をお持ちの先生方に教わったことが貴重な経験であったかと思えます。理論や問題解決のための手法等を学ぶ一方で、それが実際の政策、計画立案などまちづくりの実践において、どのように応用され

ていったか、さらに、実際の経験におけるご苦労や失敗談などが語られた講義は、今でも強く記憶に残っています。

また、私は社会工学類の3期生でしたが、先生方も新しい学類での新たな教育に情熱を持ち、まさに「フロンティア」精神で取組まれていたかと思えます。今思えば、浅慮な議論にもお付き合ひいただき、卒論・修論のゼミが深夜まで及ぶこともしばしばありました。さらに、学生も先生も職(学)住近接であったこともあり、学外でのコミュニケーションも含めて、先生方の様々なお話を通じて、一人の人間(先輩)としてのナマな思いに接することができたのは、現在の仕事に対する自分の信念であるとか、姿勢に影響を受けていると思えます。

### つくばの生活体験から学ぶ

私が在学した期間は、筑波研究学園都市がつくば科学博に向け、都市としての成長

を加速し始めた時期でした。学園都市のあちこちで建設工事が進められ、次々と施設が立地し始め、ようやく「まち」らしい姿が見えてきた時期でした。

入学当初はまさに陸の孤島で、1年生の頃は自動車免許も持っていませんでしたので、何かちょっとした買い物でもバスで土浦に出かけ、さらには常磐線(当時は電気機関車で牽引する列車もあった)で東京まで行くのも苦労でした。大学院生の頃には、つくばセンター地区に大型商業施設ができ、コンビニやディスカウントショップなども立地するなど、日常生活での不自由はさほど感じなくなりましたが、それでも今のつくばと比べると格段の差がありました。

しかし、私にとっては、このような都市が成長する姿を間近で見ながら、計画都市のいい面や悪い面を感じつつ学生生活を過ごしたことは、得がたい経験であったと感じています。

特に、就職後は、東京臨海副都心や幕張新都心、東京・豊洲地区再開発などの大規模な地区開発のマスタープランづくりや、事業計画の立案など、新しい街づくりに計画者として関わる機会が多く、つくばで過ごした6年間の経験は、これらのプロジェクトの中で検討に際して、大いに役立っていると思います。

例えば、街が成長する過程で、どの場所

にどのような業種の店舗ができ、さらに、それを端緒にどのような施設が順次立地し、人や車の動きが変わっていくかを日常生活の中で経験したことなどは、私が新しいまちづくりの計画を考える中で、どのように都市の活動が変化していくかを想定するに際して、ひとつの前例として参考になっています。

想像力を磨く経験を

学生時代を振り返って、何がうらやましいかと問われると、自由に行動できる時間があることかと思います。やはり、就職し、年齢を経ていくと、仕事や家族など様々なことで、自分の都合のみで自由に行動できる時間は限られてきます。

学生時代は、自己実現のための専門知識や技能を習得するとともに、物事を見極め、判断する力を磨く重要な時期であり、その力を身につける方法の中で、学生時代だからこそ可能なことは、自由に行動できる時間を生かし、様々な経験から知見を蓄えていくことかと思います。

特に、物事を見極め、判断する上で最も重要な能力は、ある事象が何に起因しており、次にどのような事象が起こりえるか、さらにその影響はいかなるものかを予測し、解決策をイメージする「想像力」ではないかと私は考えます。

想像力は、自らの経験から得られた知見の蓄積により磨かれていくと思います。従って、学内での様々な授業のみならず、例えば、アルバイトや旅行、NPOなどの社会活動への参画など、いろいろな体験を通じて、自分なりに何かを感じ取り、知見を蓄えていくことが学生時代において重要なことではないかと思います。

ITの進化により、インターネットを介して様々な情報が瞬時に収集できる時代ですが、だからこそ多くの情報から価値ある情報を取り出し、それらの情報を統合し、新たな価値をつくり出すことが求められます。そのためにも実体験を通じて価値ある情報を見抜く想像力を高めていくことが重要になるのではないのでしょうか。

例えば、断片的な情報であっても、その情報の背景にある事象が体験したことのある事象であれば、未体験の事象に比べて、どういう事象であるかを想像するのははるかに容易ではないのでしょうか。

これからの筑波大学について

学生の想像力を磨くために、大学のカリキュラムにおいても、夏期休暇を活用した企業や研究機関での実務研修や、学外から様々な方々を招いた講義の充実などをさらに積極的に行っていくことが考えられないのでしょうか。専門教育とあわせて、フェー

ス・トゥ・フェースで多様な価値観と交わり、自己の価値観を醸成していく機会を増やしていくことがこれからのカリキュラムにおいても重要ではないかと思います。

また、私が就職活動で当社を訪問される筑波大学の学生から受ける印象は、他の大学、特に都心部にある大学の学生と比べて、よく言えば「純朴で素直」である一方、自己アピールの弱さや「世間知らず」の面があるように感じる場合が多々あります。異質な人との交わりやいろいろな世界を垣間見る機会が少ないのではないかと思ってしまいます。

そのような意味でも、様々なコミュニケーションを誘発する観点からカリキュラムを検討していただければと思います。もうすぐ常磐新線も開通し、東京へのアクセスも一層向上するわけですから、他大学や企業との交流の機会もさらに活発に行うことが可能かと思います。

最後に、生意気なことを言わせていただければ、筑波大学がこれからも「教育と研究を通じて社会に貢献する」大学として、人々から確固たる評価を得つつける大学であって欲しいと考えます。

あさくら ひろき